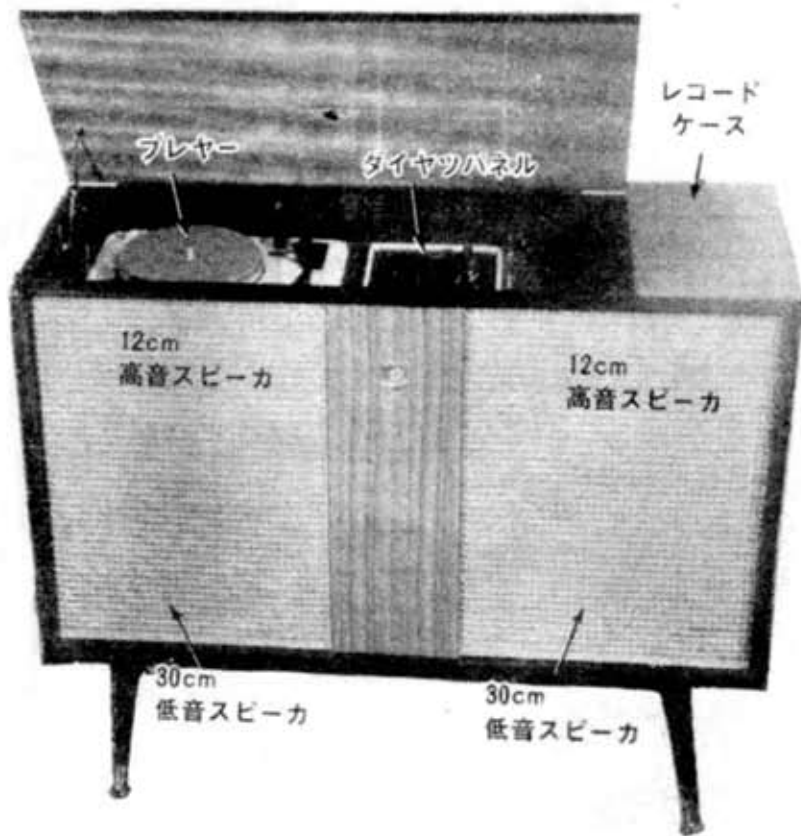


# ビクター STL-550形

現金正価 61,500円



セット前面

## 外観と構造について

昔ビクターで、共鳴筒を腹にかかえて低音をだしたヨシバチ形電器は、今でもお年寄りの話題にのぼる機械であります。“ヨシバチ形の再来”と称し

て、ビクターが盛んに売りまくっている STL-550 形を、ここに紹介しましょう。

写真に見られるように、ヨーロッパスタイルの大形ステレオで、スツキリしたデザインは、どんな部屋にもマツ

## セットの規格一覧

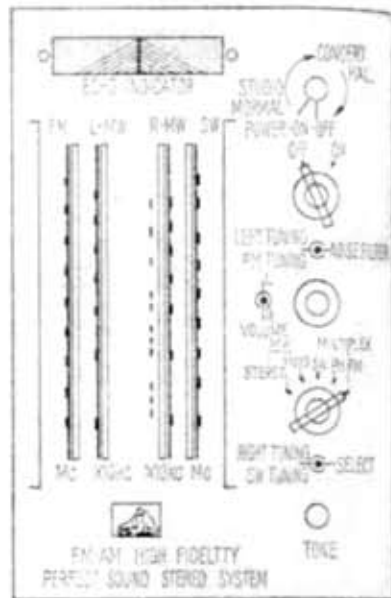
### チューナー・アンプ部

- ・形式 15球5ダイオード4バンド AM-F M組合形ステレオアンプ (2チューナー方式)
- ・受信周波数 中波 (MW) 535~1605kc 短波 (SW) 3.8~12Mc 超短波 (FM) 76~90Mc
- ・感度 毎標準界線
- ・中間周波数 AM<sub>1</sub>455kc AM<sub>2</sub>475kc FM 10.7Mc
- ・出力管 6A8×4
- ・出力 無負荷 6W+6W 最大 9W+9W

- ・電源 100V 50c/s~60c/s
- ・消費電力 95W 110VA
- ・スピーカ 高音 12cm×2個 低音 30cm×2個
- ・キャビネット 幅1000mm 高さ855mm (脚付)奥行373mm 重量26kg FMアンテナ内蔵

### プレーヤ部

- ・形式 4スピードオートステレオプレーヤ
- ・モータ シンクロナリズムモータ
- ・沖渡調整機構 なし
- ・ターンテーブル 29cm
- ・ピツクアップ、パーフェクトクリスタル形
- ・消費電力 11W



(第1図) ダイヤル操作パネル

ずし、飽きのこない印象をあたえるように設計してあります。光沢のある美しいキャビネット天板は、ポリエステル塗装で、この塗装の持つ優秀性(密着性、堅さ、弾力、耐熱性)はすばらしく、これからのステレオ機器に全面的に採用されて行くでしょう。

機能面についても価格に比較して、かなり複雑な電気回路と、数多くの特長とを備えております。

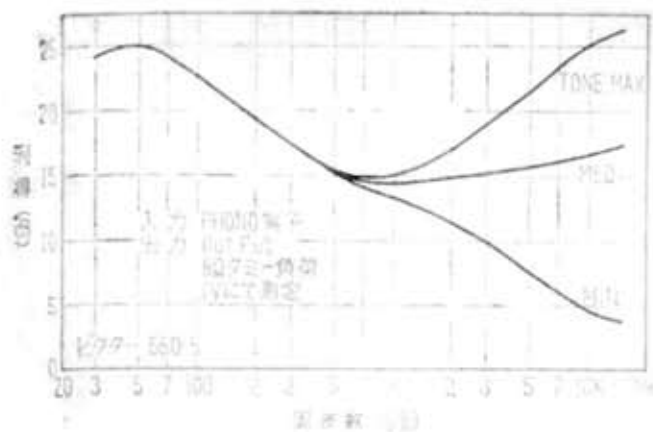
前面には、犬のマークと動作状態を示す赤いランプ(ラビットアイ)があるのみで、操作機構はすべて、キャビネット天板内部に格納されております。この配置はレコードのかけかえやダイヤル面の操作等を、変な姿勢で行えるばかりでなく、幼児にいたずらされて機械をこわす恐れがありません。

ふたをあけると右端から、レコード格納ケース、ダイヤル操作パネルおよびツマミ類、左端には新方式のオートプレーヤが配置され、同一平面上で全操作が行えるのは便利です。またランプがプレーヤを照明していますから、暗闇でもムードを損なわずにレコードの掛け替えができます。ダイヤル操作パネルは第1図のように、エコーインジケータを上部に配置し、ツマミはダイヤル目盛の右に縦に並べてありますから、右手だけで簡単に操作ができます。

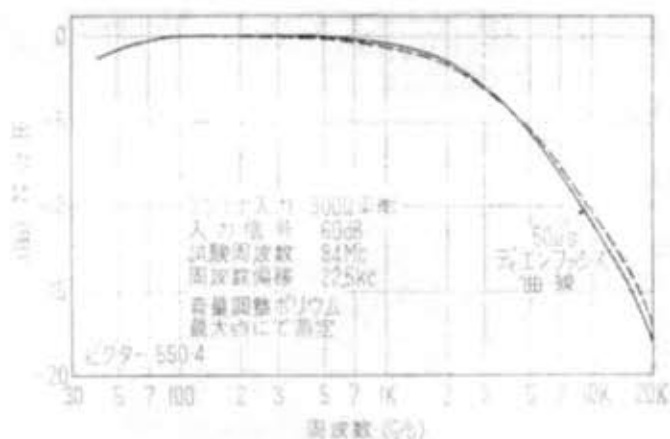
次にセット後部からみますと写真のように、低音用 30cm スピーカが 50







(第11図) 可変調音VR1による特性の変化

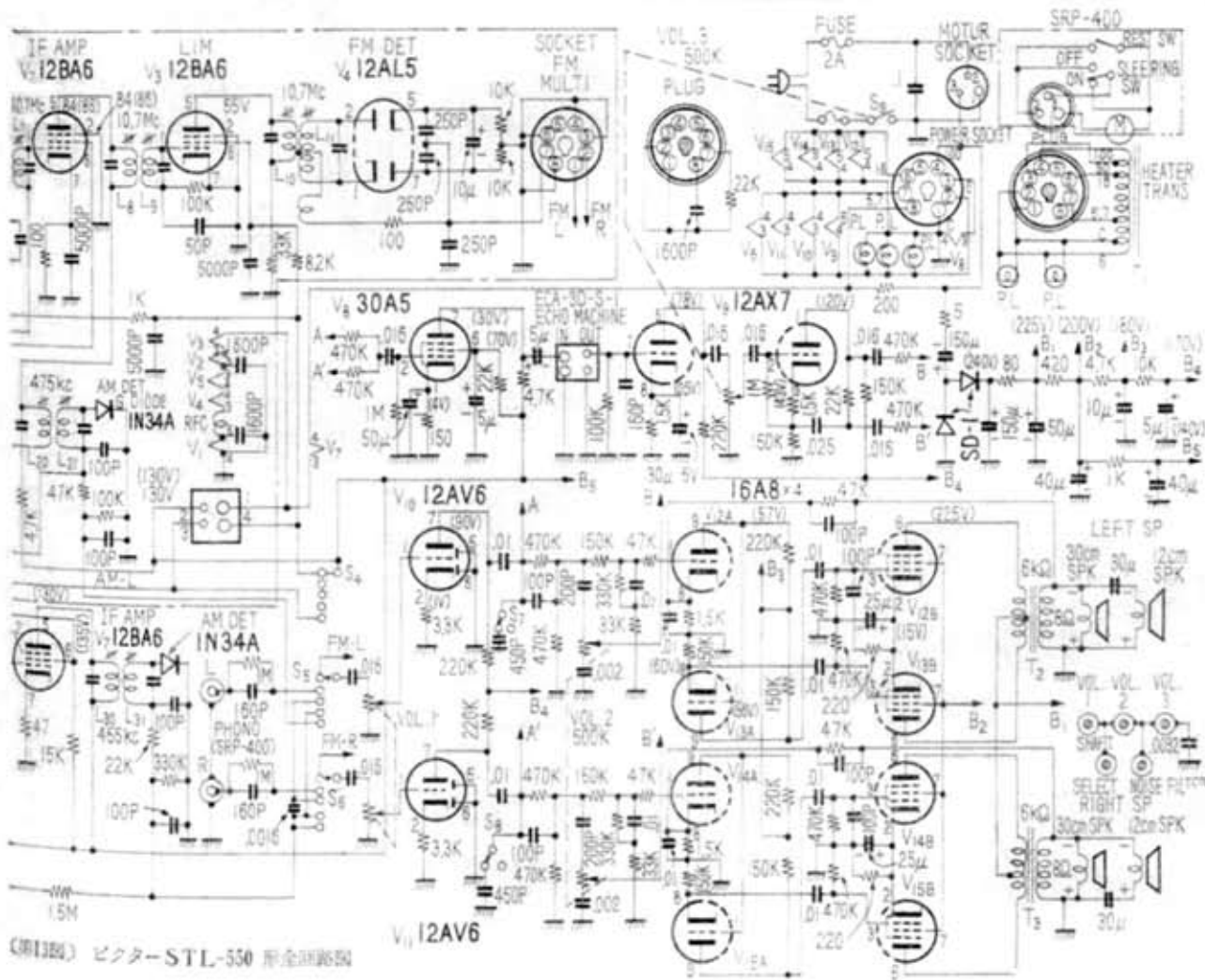


(第12図) FMの電氣的安定度特性

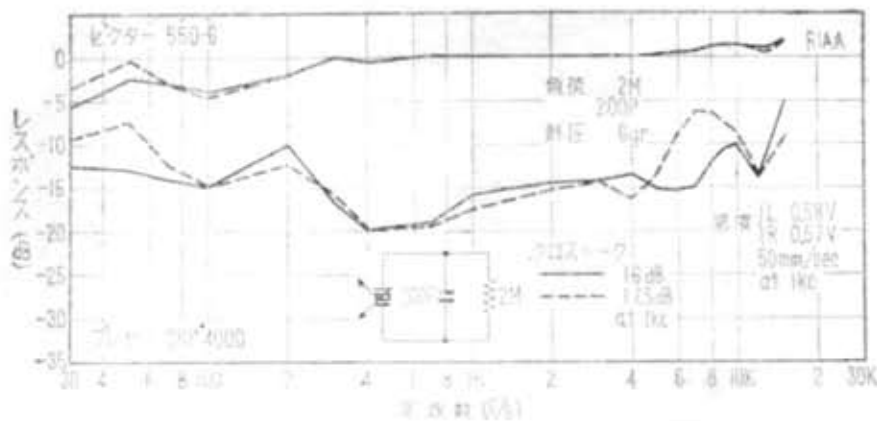
っております。ディエンファシス特性は、実験的にきめた  $1600 \text{ pF}$  と  $22 \text{ k}\Omega$  により  $50 \mu\text{S}$  カーブに  $\pm 1 \text{ dB}$  以内に入っております。ここにはマルチプレクサステレオ装置が接続可能です。AM受信部は、普通の平凡な回路であります。左右両チャンネルの発振回路に温度補償コンデンサ  $5 \text{ pF}$  (N4000) が入っておりますので、温度がどのように変化しても発振周波数の変化は、 $\pm 2 \text{ kc}$  以内に押さえられています。低周波および出力増幅部は、音をき

める回路ですからステレオでは最も重要な回路です。まず PHONO 端子に信号が印加されますと  $1 \text{ M}\Omega$  と  $160 \text{ pF}$  のネットワークにより、シールド線の高域損失を補償して、 $12\text{AV}6$  に入ります。 $V_{10}$  と  $V_{12A}$  の中間に位置する AB 間の回路は音質補償回路とエコー信号ミキシング回路をかねています。 $470 \text{ k}\Omega$  はメイン信号を  $6 \text{ dB}$  落して、エコー効果を強めるために使用されています。さらにその後にくる音質回路はボリューム  $VR_2$   $500 \text{ k}\Omega$  より以上の高

音調整が可能です。この際ボリューム回転角度に対する音質変化ができるだけ直線性を持つように、抵抗値変化が Aカーブのものを使用しています。 $150 \text{ k}\Omega$  と  $47 \text{ k}\Omega$  の間にある  $330 \text{ k}\Omega$ 、 $0.01 \mu\text{F}$ 、 $33 \text{ k}\Omega$  各定数は低域補償回路で、それぞれの値の変化により第 7 図のような特性変化を、自由自在に行なうことができます。次の  $V_{12}$   $V_{12}$   $16\text{A}8\text{PP}$  回路は直結形の位相反転回路により、五極出力部をドライブし、 $30 \text{ cm}$  スピーカを動作させるのに十分なるパワー



(第13図) ピクサー-STL-550 型全回路図

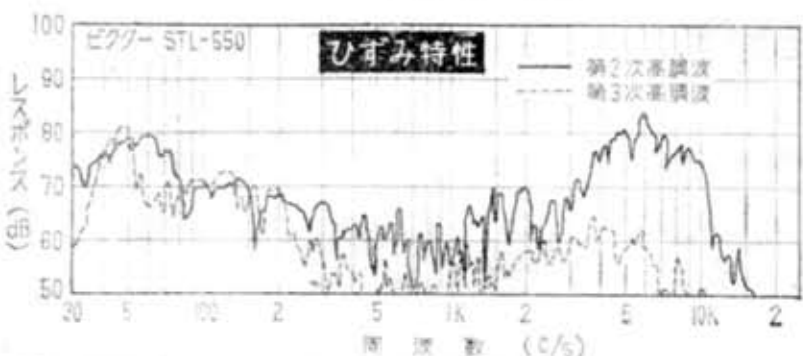
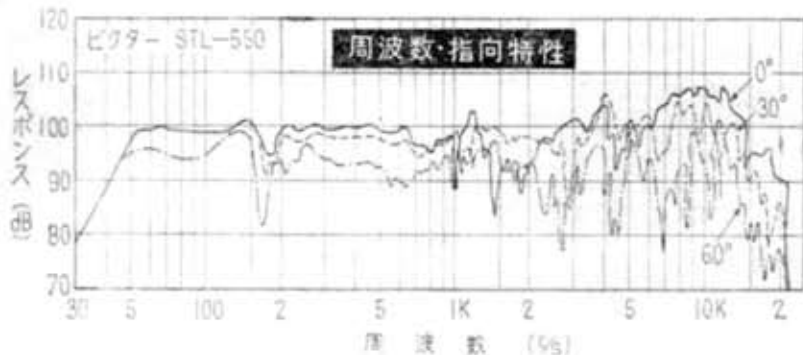
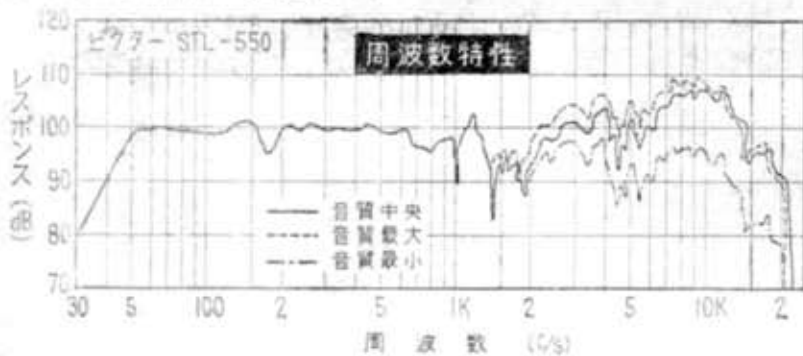


(第115) カートリッジの周波数・クロストーク特性

**実測データと見かたについて**

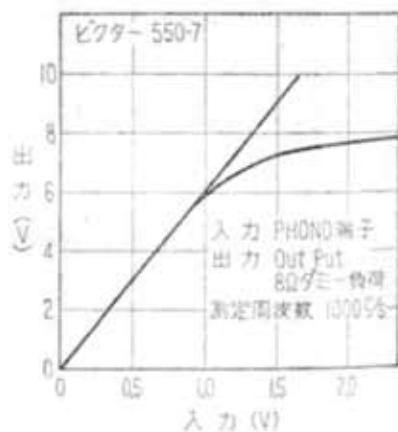
特性について 高音域で第2高調波がいちじるしく大きいのが目立つ。また 200c/s 以下の高調波も比較的大きい。正面周波数特性は高音域でやや上り気味であり、中音の谷も気にかかるが、30° 方向の周波数特性は 50~15,000c/s までほぼ一様であり、また 60° 方向の周波数特性もよく、あらゆる方向に一樣な強さで音

がでていると考えてよからう。聴いた感じ いわゆるビクター・トーンと呼ばれるクセがあるが、最もまとまりのよい音質の1つ。ハデさと素直さが適当にミックスした感じで、終段出力回路がPPであることと相俟つて、音量を上げて音もきたなくなることはない。口径30cm。

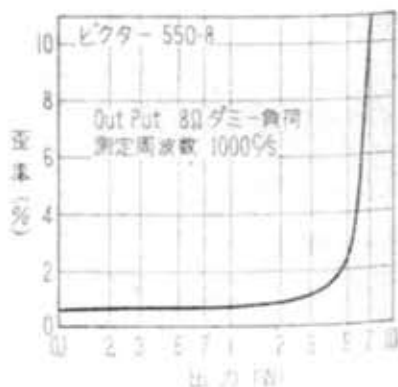


を得ております。ネガティブフィードバックは約 5dB かけ、ダンピングのきいた低音を再現することができます。12cm スピーカのボイスコイルは、アルミ線で、30 $\mu$ F の無極性コンデンサにより、クロスオーバー周波数を 750c/s にとり、中高域を受け持っています。

エコー部分には、左右チャンネルの信号をミックスして AA' にかけたりだし V<sub>1</sub> 30A5 によりマッシュをドライブしますと、第8図のようにマグネットが回転し、コイルパネに振動を伝えます。この振動はパネの時定数にしたがい、反射をくり返しながら減衰して行き、その残響信号をビクタアツコイルがひろいます。時定数の異なる2本のコイルパネを使用していますから優秀な残響特性を示めます。このエコー信号は V<sub>2</sub> 12AX7 で増幅され、位相反転回路と移相回路を通り左右チャンネル BB' に加わります。電源回路は、内部抵抗の小さなシリコンダイオードを使用した倍圧整流回路の採用によって、最大出力時においても、電圧変動 (53頁につづく)



(第158) 入出力特性



(第160) 歪率特性